奈良県立医科大学 学生ボランティアバス 活動報告

１　概 要

学生２０名教職員４名は、平成２３年８月２６日（金）から３０日（火）の５日間（現地では丸３日間）、東日本大震災の被災地である福島県を訪ね、相馬市、南相馬市において仮設住宅の集会所で行われる仮設サロンでの傾聴活動、健康調査のボランティア活動に参加、福島県立医大救急科島田先生に DMATについて、整形外科大谷先生に放射線の影響や福島医大の状況、宮崎先生に除洗棟について、南相馬市立総合病院長金澤先生に発災直後の同病院の医療活動について講義を受け、震災発生後の福島県内の医療について理解を深めた。

福島県立医大の学生からは、被災直後や被災後のボランティア活動についての活動報告を受け、交流会では学生相互の交流をした。また、南相馬市の港湾施設、原子力災害対策法に基づく警戒区域の立ち入り制限の検問所などを視察し、被災地の現状、復旧状況を確認した。

帰路のバスの中と９月８日に今回の活動について振り返り、成果、問題点、今後の活動などについて話し合いをもった。

今回ボランティア活動に参加した学生は皆一様に自分に何ができるのかという不安をもっていたが、現地で積極的に活動し、いろいろな話を聞く中で震災や被災地福島に対する意識が変わり、困っている人のためにできるかぎり役立ちたいという想いが強くなった。

２　活動内容

（１）ボランティア活動

ア 仮設サロンでの傾聴活動

２８日午後には南相馬市で学生２０名教職員３名が２班に分かれ、２９日午前は相馬市、南相馬市で学生１６名が３カ所に分かれ、仮設住宅の集会所で開かれる仮設サロンで、血圧測定、傾聴活動を行い、健康や生活の不安、避難所での生活などを伺うとともに、せんとくんによる慰問も行い、集会所に来られた高齢者、 子供たちと交流した。

あまり眠れない、新たな場所での生活に慣れない、これからの生活がどうなるかわからないといった不安を訴える方が多く、心のケアがまだまだ必要であると実感した。

こどもたちはあまり外で遊んでいないためエネルギーをもてあましている様子で、室内で非常に元気よく遊んでいた。

ある意味で仮設サロンに来られる方はまだ問題は大きくないほうで、体が不自由で仮設サロンに行けない、仮設住宅などにひきこもってしまっているといった人のほうが、より多くの支援を必要としているのではないか、仮設サロンだけではすべてのストレスは解消されないのではないかと思われる。

イ 健康調査

２９日午前、学生３名（医学科４年堀本、看護学科４年植野、小佐）教職員１名 （看護学科堀江先生）は、南相馬市保健センターが実施している避難住民の健康調査に同行した。事前に配布した健康調査票を回収し、健康状態を確認するという内容であった。調査の対象者は、元々原発の警戒区域で生活をしていて、この１～２週間で避難所などから仮設住宅に移ってきた方が多く、どこで診療を受ければよいか、以前に診てもらっていた医師に診てもらえないといった相談もあった。

参加学生の中には、専門的な知識をしっかり身につけ、地元の医療の状況にも詳しくなければ、ボランティアとしての参加は難しいのではといった意見もあった。

（２）講義、講演、視察

救急科の島田先生からは、災害時の医療、DMATの役割について講義を受けた。発災直後の患者の受け入れ状況、DMATの参集と活動状況、原発の警戒区域が設定され立ち入り制限、避難指示がでてからの患者搬送の状況などついて詳しく説明を受け、災害急性期の医療について理解を深めた。震災前の訓練により、スムーズに広域搬送ができたとのことだった。

整形外科の大谷先生からは、福島医大の行った災害医療、放射線の基礎的知識、原発問題によって福島県に与えた影響、福島医大の教育・研修に与えた影響、福島医大の責務、今後の活動（県民健康管理調査）などについて講義を受けた。大谷先生は、福島の現状を知ってもらいたい、福島のサポーターになってもらいたいということを強調されていた。

放射線科の宮崎先生からは、除洗棟において放射性物質を除洗する手順の説明、原発事故での被爆者受け入れの状況の説明などを受けた。

南相馬市立総合病院長、金澤先生からは、被災直後の診療の状況、原発事故の際の病院の対応、その後の病院の取り組みなどについて説明を受けた。

福島医大医学科６年の垣野内さんからは、発災直後の学生ボランティアの活動について説明を受けた。学生ボランティアの招集、大学との連携、他県から受け入れた DMATチームの応対、原発事故直後の学生ボランティアの解散と再編成の状況、避難区域からの受け入れ患者の搬送の際の状況などを話してくださった。

５年生の斉藤さん、４年生の鈴木さん、荒井さんは、避難してきた子供たちを対象としたボランティアの活動内容や避難所の状況、子供たちの精神的な状態などについて話された。学生という立場のため、５月以降、授業が始まると、学業、課外活動などで、ボランティア活動に取り組むことのできる時間が減ってしまったとのことだった。斉藤さんは「震災を風化させないでほしい」と訴え、参加学生はこの想いを持ち帰って伝えなければならないと強く感じた。２年の高岡さんからは、春期休暇中に地元で行った募金活動についてどのような募金活動行ったかや問題点、改善したあとの結果などについて報告を受けた。

垣野内さん、高岡さんの活動は日経メディカルオンラインにも掲載されているが、実際に話を聞いたほうが内容も濃く細かなニュアンスも伝わってきて、実際の活動の大変さを感じることができた。

3 成 果

（1）被災地の現状、ニーズの把握

８月下旬での福島県の現状について実際に自分たちの目で見ることができた。復興に向けて徐々に進んでいるものの、まだ撤去されていない船や車、折れたままの大きな鉄塔や電柱がみられた。

相馬市、南相馬市は、原発の警戒区域から避難している人が多い。この地域の人は 農業を営んでいた人が多く、避難所では農作業をすることがないので運動不足となり、運動器症候群（ロコモ）につながることもある。かかりつけ医に診てもらえなくなったことや、健康上の不安を訴える方も多かった。

仮設サロンは、通常は社会福祉協議会（社協）の若干名で行われていることが多いようである。福島県の海岸沿いはもともと人の少ない地域であり、問題を抱えている被災者の声を吸い上げる人も不足しているように感じた。今回のように、ボランティアとしてある程度の人数で参加すると、少ない人数では聞き取るこのとのできない話も聞くことができると感じた。

現場の状況を自分の目で見て現地の人と話すことで、避難や復興の状況、ニーズの変化を感じ取ることができた。

（2）参加学生の心理的変化

「講義で福島県の放射能汚染は一部地域を除いて基準値を下回っていること、メディアの報道よりも安全であることがわかり、福島県に行くことに対する不安は自然となくなっていった。」（看４植野）「土木作業や避難所・仮設住宅で何らかの形で支援することがボランティアだと思っていたが、何をすると決まっているものではなく、被災地の方々をおもってする全てのことがボランティアだと考えが変わった。自分のできる１番のボランティアは見聞きしたこと感じたことを伝えること。」（医５上島）

参加学生は共通して、福島の原子力災害に対する不安が軽減し、ボランティアは小さなことでいいから行動すればよいと考えるようになった。

（3）福島医大生との交流

福島医大生によるボランティア活動の報告と交流会での交流を通して、福島医大生が伝えたい想いがあることを知った。引き続き交流し情報交換することで、その想いをできるだけ多くの人に伝え、福島や福島医大に貢献したいと気持ちが変化した。

4 検討事項

（1）活動内容

ボランティア活動がやや少なかった。活動日を平日にすることで、社協の実施する仮設サロンに参加しやすい日程にする。直接社協と連絡をとり活動の内容、時期、参加人数などを調整する。

海岸のゴミ拾い、休み中の子供たちの勉強をみたり体育館を借りて遊び相手となる、社協の健康調査や県の健康管理調査のお手伝い、新たなニーズに対応した活動などをボランティア活動として行うことができそうである。

福島医大への依存があったが、次回からは、宿泊施設を今回利用した福島県青少年会館や他の研修宿泊施設を自分たちで手配する、ボランティア活動は直接社協と調整する、昼食はまとめて準備するかコンビニで各人準備する、講義は青少年会館の研修室を利用するといった方法もある。

（２）活動拠点

宿泊場所を予定に応じて変えるより、今回利用した青少年会館を連泊でもよいのではという意見が多かった。福島県青少年会館（福島市）と仮設サロンの南相馬市とは片道１時間半程度で移動可能であった。

（３）活動期間

今回は現地で３日間だった。長く活動したい人もいるが、一般の人が長く予定をあけることは難しいかもしれない。何を活動するかによって日程も変わってくる。

（４）移動手段

大学から北陸道経由で福島市中心部まで、バスで休憩を含め１２時間で移動できた。人数が集まれば、今回と同じバスを利用すればよいのではという意見が多かった。レンタカーは運転手の身体的、精神的負担が大きくなる、新幹線・飛行機の利用は金銭的負担が大きくなるというデメリットが挙げられる。

５ 今後の活動

福島の復興の支援と福島医大生との交流を継続するために、災害ボランティアのグループを立ち上げることとした。ボランティアに参加したい学生が誰でも参加できる組織にしたい。

活動の内容としては、前述の福島でのボランティア活動、福島医大生との交流、今回のボランティア活動の報告がまず第一に挙げられる。福島医大生との交流は、インターネットなどを利用した情報交換、福島に赴き学生の話を聞く、福島医大生を招き奈良で講演や活動報告をしてもらうといったことが考えられる。今回のボランティア活動の報告は、まず大学祭シンポジウムでの活動報告（１０分程度）と写真展示を進めているが、活動報告のビラを作り掲示するなど、他の方法も模索したい。

ボランティア活動に参加するにあたり、放射線や DMAT、傾聴活動の方法など前もって勉強してから行くと現地で効率よく活動が行える。傾聴活動は、被災した方にどのように接したらよいのか、健康状態や生活の不安事項を把握するために何を聞けばよいのか、家族や親類をなくした方がいる中でどのようなことを言ってはいけないのかということを事前に勉強し、トレーニングもしておくとなおよい。誰が教えるのか、学生同士で教えるのか、先生に教えてもらうのか、先生を招くときはどうするのかといったことは検討事項となる。

災害ボランティアとして、いざというときに学生ボランティアの中心となり活動できるように準備することも活動内容に入れようという意見もあった。大学病院で学生ボランティアが多数必要な時に速やかに大学の指揮下に入り、担当する業務の割り振りができるように平時から準備する。DMAT, JATEC, JPTECについて勉強してはどうかという意見もあったが、

それなりに時間がかかる。発災時には大量の患者を搬送したり、外部から来た人に対する案内など細かな業務が多くなることも予想される。専門的な内容を勉強するか、後方の業務について学ぶかについては意見が分かれた。

ボランティアグループの組織形態としては、委員会・協議会、サークル、社医研など既存の部活・サークルの一部となるといったものが挙げられる。委員会・協議会として学務課などと協調して活動するならば、学生へ連絡する際にクラスのメーリングリストを活用できる、先生方の協力を得やすいという利点があるが、より大きな責任を果たす必要がある。サークルであれば他の部活と横並びとなり、寄付金のお願いがしにくくなるという意見があった。既存の組織に組み入れる場合、その組織の活動の目的に合うのか、そもそもこちら側の考えだけで受け入れてくれるのかという疑問が生じるため、現実的な選択肢ではないものと思われる。今後、大学側と話をしつつ、学生がどのような活動をしたいかといったことも踏まえて、グループをどのような位置づけにするかを決めていきたい。

6 参 考

(1) 参加者学生

井上博人（医学科６年）　浅田翔平、上島小百合、高松雄一（医学科５年）

尾崎邦彰、長命俊也、堀本和秀、三宅龍太（医学科４年）

撫井貴弘（医学科３年）　佐々木健人（医学科２年）

石田憲太朗、面川渚、柿崎華奈、阪本宗大、中務智彰、細川真、吉川大貴（医学科１年）

植野麻里、小佐裕子（看護学科４年）

福静香（看護学科１年）

(2) 同行教職員

石指宏通（医学科）　堀江尚子（看護学科）

松村哲也（学務課）　和田恵美（総務課）

(3) 新設ボランティアグループ

名称（仮）奈良 will

代表（仮）中務智彰

１年（仮）　医学科 柿崎華奈　看護学科 福静香

２年（仮）　医学科 佐々木健人　看護学科 欠

３年（仮）　医学科 撫井貴弘　看護学科 欠

４年（仮）　医学科 三宅龍太　看護学科 植野麻里

５年（仮）　医学科 高松雄一

６年（仮）　医学科 井上博人